

現代カンボジアにおける偉人の創出とその過程

岡田 知子

はじめに

1. 首都プノンペンのパンテオン化
2. 現代の国定国語教科書にみられる偉人
3. 武将デチョーの物語
4. 新たな偉人の創出

おわりに

はじめに

カンボジアは 1953 年の独立後、半世紀の間に国家の体制が 5 回変わり、現在の首都プノンペンの街路や広場、公園の名称や記念碑、銅像からはそれぞれの時代の物語の片鱗を見ることができる¹⁾。アンコール遺跡の図柄一色だった観光者向けの絵葉書にも「カンボジアの激動の歴史を語るプノンペンの記念碑」として 5 種の記念碑や銅像の写真が横一列に配されたものが見られるようになった²⁾。

カンボジアの記念碑や銅像、偉人に関連する研究としては、19 世紀から 20 世紀におけるカンボジアの国民形成やナショナリズムを議論した Edwards[2007]、中でもカンボジアの芸術分野における人材養成と作品の生成について概観した Muan[2001]、公定ナショナリズムとかわる点として、独立後の理想化された人物や国民的英雄について言及している笹川 [2006] がある。また Yamada[2004] では、アメリカにおけるクメール系ディアスポラのアイデンティティと英雄に対する顕彰行為の関係を論じている。

本稿では、独立後プノンペンに建立された記念碑の変遷を概観するとともに、現在、カンボジア政府が「偉人」としている人物及び選定された背景について、近年プノンペンに建立された銅像と、現在使用されている国定国語教科書やそこに掲載されている文学作品をもとに検討する。その結果、銅像建立によって首都プノンペンの一部がパンテオン化しており、銅像となっている人物の功績が新版 (2010 - 2012 年) の国語教科書で取り上げられていること、とくに現在のタイであるシャムとの戦闘で名高い武将とされるデチョー・ミアハ、デチョー・ヨートが新たな偉人として創出されていることとその理由を明らかにする。本稿では、偉人と英雄の区別をせず便宜的に「偉人」とし、また光永 [1999] の銅像の定義に従い、像の素材や形態の区分を問わず、人物の像についてすべて「銅像」と呼ぶ。

1. 首都プノンペンのパンテオン化

1.1. 独立後の首都プノンペンの公共空間の変遷

プノンペンには、1953年の独立後フランス植民地時代の様相を引き継ぎながら、近代独立国家の首都として整備されていった。その様子は小説にも描写されている。カンボジア語による初めての散文小説『ソバート』(1938)では、地方から単身上京した少年の目に映ったフランス植民地下のプノンペンは「立派な屋敷が立ち並び大勢の人々が行き交う都会」で「さまざまな車が大通りを走って」おり、この賑やかな光景は、独立後、さらに発展する。1960年度インドラデヴィ文学賞1位を受賞した『古い大地に新しい太陽が昇る』(1961)では、「道路が整備され、水道や電気も十分に使えるように」なり、さらに「以前は汚水の臭いがしたところに、独立を記念するアンコールワット遺跡のようなすばらしい建築物が現れた」。これは建築家ヴァン・モリヴァンの設計で1963年に建てられた独立記念塔であり、クメールの魂が宿るところ、また国の永続を象徴するものであった³⁾。

首都プノンペンの都市計画は、ヴァン・モリヴァンの設計のもとすすめられた。独立記念塔だけではなく、橋、劇場、迎賓館、集合住宅など、現在でもランドマークとなっている建築物と公園が整備されていった。ヴァン・モリヴァンはル・コルビュジェが提唱した都市創造理論「輝く都市」に影響を受け、住居周辺には公園を整備することが必要であるとした⁴⁾。その結果、首都中心部には広々とした公園やロータリーが確保されたが、銅像や記念碑が建立されることはなかった。

個人を特定できる銅像の代わりに公共空間に示されていたのが、街路の名称であった⁵⁾。ノロドム、モニヴォン、シハヌーク、スラムリットなどおもに19世紀以降の歴代の王の名前が付けられた。世界各国の要人も親交を深めていた当時の国家元首シハヌークは、国内外で推進していた中立政策の証のひとつのように、シャルル・ド・ゴール、ネルー、毛沢東といった名前を街路に付した。

1970年、無血クーデターの後、親米のクメール共和国になると、新たに定められた国の標語「自由、平等、友好、進歩、幸福」が刻まれた塔が王宮前広場に設置され、同国の樹立宣言日をもって「10月9日塔」となった⁶⁾。反仏運動のために逮捕された僧侶ハエム・チアウの記念塔も王宮近くに建立され、記念式典が1972年に行われた⁷⁾。

1.2. 社会主義的な公共空間

1975年4月、クメール・ルージュがプノンペンに入城すると、市民は追放された。プノンペン発祥の地とされる丘、ワット・プノムのおもに植民地時代に設置されたシソワット王像、通称「ふたりの像」と呼ばれていた第一次世界大戦の戦争記念のフランス兵士とカンボジア兵

士の像、クメール共和国時代の塔は撤去された⁸⁾。この時代には、ポル・ポトの肖像画や胸像が製作されたが、実際に公共の場に設置されることはなく⁹⁾、さらに革命記念像として、民衆の列の前に立つポル・ポト像がワット・プノムに建てられる予定だったが、ベトナムの侵攻によって実現しなかった¹⁰⁾。

ポル・ポト政権崩壊後、ベトナム指導型の社会主義体制下では、独立記念塔は戦勝記念塔と名称が変更された¹¹⁾。そして社会主義リアリズムの手法による新たな記念碑、「カンボジアとベトナムの人民と軍の闘争的結束と友好記念碑」が建立された¹²⁾。この手法の特徴は、建造物が巨大で、筋骨隆々とした肉体を強調した様式であり、同時に設置場所なども考慮されてイデオロギー性の高い空間を作り出すことであった¹³⁾。1980年代、ベトナムにおいて人物を模した彫刻、および建築を組み合わせた人物像記念碑の建設が推進されていたことも影響していたと考えられる¹⁴⁾。王宮に近く、王族の墓地にもなっているボトム寺院前公園に建てられた同記念碑は、子どもを抱いたカンボジア人女性¹⁵⁾を庇護するかのよう、銃を持ったカンボジア人およびベトナム人兵士2名が背後に並んで立つ像を中心にした石柱碑である。これは両国友好のシンボルとされ、地方都市部でも同様のモチーフとデザインの像が設置された¹⁶⁾。1988年に行われたベトナム軍高官及び専門家に対する勲章授与式典の際にもこの像のミニチュアが会場に飾られている¹⁷⁾。



【写真1】ベトナム義勇軍記念碑



【写真2】ベトナム義勇軍記念碑

この記念碑は、1979年1月7日を「ベトナムによるポル・ポト政権からの救済」、あるいは「ベトナムのカンボジアへの侵攻」と解釈するのか、また同時に1980年代のベトナム軍駐留の意味について常に公に問いかけるものとなり¹⁸⁾、1998年、2007年には、政府がベトナム寄りであると弾劾するグループの主導による破壊行為にあっている¹⁹⁾。その後リノベーションにより、

台座周辺の広場にタイルが敷き詰められ、塔の側面にはカンボジアとベトナムの国旗の柄が重なった装飾、正面下部にはカンボジア語とベトナム語による「ベトナム義勇軍記念碑」というプレートが付けられた【写真1】【写真2】。「両国の友好」ではなく、ベトナムのカンボジアに対する「貢献」を強調することで、記念碑の存在意義を示していると考えられる。

この時代に建立されたもう1基は、ポル・ポト時代の虐殺慰霊記念塔である。1988年初頭、政府の指示でカンボジア人建築家リム・オークの設計により、虐殺現場のひとつであったプノンペン市郊外のチューン・アエクに1989年、ガラス窓入りのコンクリート製の塔が完成し、野ざらしになっていた約9千もの頭蓋骨が並べられた²⁰⁾。ここでは、1983年に「1976年5月20日にクメール・ルージュが残虐で継続的な虐殺を全国的に展開した」という理由で制定された5月20日の「悲憤の日」の記念式典が、1990年代終わりから現在にいたるまで毎年、プノンペン市主催によって催されている²¹⁾。しかし制定理由が一般に容認されていないためか、国家によって定められた記念日とはなっておらず、現在では1980年代の流れを汲む与党の人民党が中心となって式典に参加している。

1.3. パンテオン化するプノンペン

1993年にふたたびカンボジア王国となってから、プノンペンは市長チア・ソパラ（在任期間1998－2003）によって整備されていった。街路の名称は【表1】のような変遷をたどった。クメール共和国では個人名を排除し、カンボジア人民共和国では抗仏や共産党に関わる人物名を採用、1990年代半ばごろから、1960年代の旧カンボジア王国時代の名称に戻された²²⁾。

【表1】プノンペン市内の街路名称の変化の例

カンボジア王国	クメール共和国	カンボジア人民共和国	カンボジア王国
ノロドム	10月9日	トゥー・サモット	ノロドム
モニヴォン	民主	アチャー・ミアン	モニヴォン
カンプチア・クラオム	カンプチア・クラオム	カンプチア・ベトナム	カンプチア・クラオム
シャルル・ド・ゴール	シャルル・ド・ゴール	アチャー・ハエムチアウ	シャルル・ド・ゴール
毛沢東	自由	ケオ・モニー	毛沢東
ソビエト連邦	ソビエト連邦	ソビエト連邦	ロシア連邦

同市長の業績を中心にまとめた『プノンペンー1997年の前と後』によると、チア・ソパラは銃器撤廃、人身売買撤廃、裁判制度改革を徹底的に進めたほか、美しい公園であふれた首都こそが平和、友情、安定を象徴する、として公園整備に重点を置き、1999年には王宮前のトンレサープ川岸を1キロに渡って整備するなど、プノンペン中心部の複数箇所を公園として整備した²³⁾。装飾的な目的で、1998年にナライ神像、2000年にヴィシユヌ神像が公園や広場内に設置され²⁴⁾、唯一大規模な式典も行って建立したのは1999年12月の銃器根絶の記念碑のみで、それ以外に記念碑や銅像が建立されることはなかった。

プノンペン市内の公共空間に記念碑、台座にのった巨大な銅像が次々と建設されるようになったのは、後任の市長カエプ・チュテマーの在任期間中（1998 - 2013）である。プノンペン市の「都市開発戦略 2005 - 2015」によると、「ビジョン 5：経済発展」の中で、観光分野の改善、開発が謳われている。その戦略として「観光における自国文化の価値に対する自覚を高め、クメールの芸術文化を維持し、推進するために不適切な外国文化を阻止する」ことがあげられ、その指標は「必要な法律の制定、自国文化プログラムの普及、クメールのアイデンティティとクメール文化を保護、不適切な外国文化の阻止、クメール現代文化の創作」とある。銅像建立がナショナル・アイデンティティの提示と創作に合致すると考えられたことは想像に難くない。

プノンペン市および政府によって建立された像、記念碑を【表 2】に示す²⁵⁾。

【表 2】プノンペン市によって設置された像、記念碑

名称	内容	除幕式	出席者
チュオン・ナート像	カンボジア国語辞典編纂者	2008 年 2 月 21 日	市長 僧侶長
クロム・ゴイ像	国民的詩人	2008 年 2 月 21 日	市長
ドーン・ペン像	プノンペン始祖	2008 年 5 月 16 日	市長 国王
コンヒン嬢と鰐の像	古典物語の登場人物・動物	2011 年 9 月 17 日	市長 市公共運輸局長
プロムの塔	2010 年 11 月 22 日のダイヤモンド島橋事故慰霊塔	2011 年 11 月 22 日	市長
ガネーシャ像	ヒンドゥー起源の神	2012 年 2 月 2 日	市長
デチャー・ミアハ、 デチャー・ヨート像	17 世紀の武将	2012 年 9 月 1 日	副首相 市長夫妻
聖なる雨の神像	雨と平安をもたらす神	2013 年 4 月 22 日	市長夫妻 市文化芸術局長
ノロドム・シハヌーク 元国王像	独立の父、国王	2013 年 10 月 11 日	国王 皇太后 首相 各国大使

実在の人物とされている銅像は、国語辞典を編纂した大僧正チュオン・ナート、国民的詩人のクロム・ゴイ、14 世紀のプノンペンの始祖と言われる女性ドーン・ペン、17 世紀の武将デチャー・ミアハとデチャー・ヨート、シハヌーク元国王である。カエプ・チュテマー市長は、除幕式のスピーチで銅像建立の重要性について言及しており、たとえばドーン・ペン像の除幕式では、「社会発展に参加したすばらしい女性であるドーン・ペンに対する尊敬の念とその恩を、人々が記憶するように建立したものだ」と述べている²⁶⁾。聖なる雨の神像の除幕式では、「フン・セン首相が、後世のカンボジア人が歴史と業績を理解し尊ぶために、カンボジアの偉人たちの銅像を建設することを許可した」と銅像建立が首相肝入りの事業であることを述べ、さらに「プ

ノンペンの美観と観光客誘致のために銅像を設置している。ドーン・ペン像によってノンペン誕生を想起し、チュオン・ナート、クロム・ゴイはカンボジア文学の守護者であり、デチャー・ミアハ、デチャー・ヨートは、我々の領土を守ってくれた英雄である²⁷⁾とこれまで銅像となった人物の功績を説明している。つまりこれら銅像にされた人物こそ、現在政府が国民に推挙する国家的偉人であると宣言しているに等しい。



【写真3】チュオン・ナート像

それではどのように個々人の功績を銅像を通して提示しているのか。チュオン・ナート像は跏趺坐姿で、高僧であることを示す傘蓋がある【写真3】。クロム・ゴイ像は、自作の詩を吟唱した際に奏でたとされる弦楽器サーディアウを抱え座した姿で、その台座面のプレートは彼の著名な作品のひとつである「クロム・ゴイの遺言」の一節が記されている。ただしこの作品に関する出典や説明はない。ドーン・ペン像は、天蓋付き台座にカンボジアの伝統衣装を身に付けた中年女性が直立しているもので、台座となっている全ての面にはドーン・ペンの物語のレリーフがある。ノンペンの始祖という抽象的な功績は、ノンペン発祥の地といわれるワット・プノムから遠くない広場に設置することで具体化されている。またシハヌーク元国王像は、天蓋付きの台座の上に立つスーツを身に付けた像で、正式名と生没年²⁸⁾の他、カンボジア語と英語で「英雄的な王、独立の父、領土保全とカンボジア国家統一」²⁹⁾というプレートが付けられている。独立記念塔の近くの公園に設置することで、像を正面から見れば背後に独立記念塔が見えるように設計されており、独立という抽象的な功績が示されている【写真4】。一方デチャー像は、他の像が直立あるいは坐位といった「静止」した姿であったのに対して、躍動的な軍人の騎馬像である。前脚を高く掲げた馬の上でタイの位置する西方を向いており、力強さや生命力が感じられるより自然のままの岩山を台座としている【写真5】。



【写真4】ノロドム・シハヌーク元国王像



【写真5】デチャー・ミアハ、デチャー・ヨート像

これらいずれの銅像も 1m 以上の台座に設置され、見学者は仰ぎ見なければならない。台座の高さは見る者が見上げるような高さであれば、簡単に近寄ることも直接手を触れることも不可能であることから、その威厳や神聖性は保たれ、国家にとって重要な人物であることがわかる³⁰⁾。

これまで概観してきたように、著名人の名前が付された街路、公園、銅像が集まっているのは、プノンペンの中心地である 7.4 km² のドーン・ペン区³¹⁾とその近辺である。この地域は小さくまとまった空間で、政府によって選ばれた偉人の顕彰のための場、パンテオンとしての役割を近年になってから果たすようになったともいえる³²⁾。このパンテオン化したプノンペンの一区画である公共空間に置かれるには一定のルールがある。道路や公園には、現役の政府高官や経済界で活躍している民間人の名前が付けられていることから、物故者である必要はな

く、また政府関係者である必要もない。銅像についてはどうであろうか。カンボジアでは、仏像や神像をはじめ、精霊信仰から木片や石などが祀られ、像は宗教的信仰の対象になりやすい。2010年5月17日付の内閣府令では「存命中の人物像を作るのは、カンボジアの伝統にそぐわない」「生前には、銅像による栄誉は与えられない」との理由から、「カンボジア政府高官の彫像、塑像の製作、また設置、売買の禁止」令が出された³³⁾。つまり像にする人物は物故者でなければならないのである。

2. 現代の国定国語教科書に見られる偉人

さて、【表2】であげた銅像のうち、シハヌーク元国王像以外は、説明のプレートなどが設置されていない。銅像となっている人物に関する知識はどこで得られるのか。ひとつの方法として考えられるのが学校教育である。

教育省が2004年に出した「カリキュラム開発政策2005-2009」によると 国語、数学の知識、またナショナル・アイデンティティの知識の獲得が重要視されており、初等教育(1-6年生)、中等教育(7-12年生)を通じて国語の授業数が多い³⁴⁾。国家政策として国語教育の中でナショナル・アイデンティティを育てていこうとしていることがわかる。

国語教科書で取りあげられている著名なカンボジア人は【表3】のとおりである。

【表3】国語教科書に掲載された偉人一覧

学年	1999 - 2002			2010 - 12		
	偉人名	生没年	課のタイトル	偉人名	生没年	課のタイトル
4	ニュック・ダム (画家)	1934 - 1977	趣味	なし		
	ジャヤヴァルマン7世 <挿絵>	12世紀	業績のある人			
	ヌー・コン (作家) <挿絵>	1874 - 1947	同上			
	セット (作家) <挿絵>	1881 - 1963	同上			
	ロ・セレイソティア (歌手) <挿絵>	1948 - 1977	同上			
	ヌー・コン (作家)	1874 - 1947	同上			
	チュオン・ナート (国語学者) <写真>	1883 - 1969	同上			
	チュオン・ナート (国語学者)	1883 - 1969	同上			
ヴァン・モリヴァン (建築家)	1926 -	同上				
5	シン・シーサモット (歌手)	1932 - 1976	才能と芸術家の業績	インドラデヴィ (ジャヤヴァルマン7世紀) <挿絵>	12世紀	素晴らしい偉人
	ニュック・ダム (画家)	1934 - 1977	同上	チュオン・ナート (国語学者) <挿絵>	1883 - 1969	同上
	イアン・サーイ (画家、手品師)	1900 - 1978	同上	クレアン・ムアン (武将)	16世紀	同上
	イウ・カウフ (政治家、タイプライター作成、詩人、作家)	1905 - 1950	古典芸能	チュオン・ナート (国語学者)	1883 - 1969	同上
	クレアン・ムアン (武将)	16世紀	果敢に挑戦	クロラーハオム・コン (抗仏の志士)	19世紀	同上
			クロム・ゴイ (詩人) <写真：銅像>	1865 - 1936	カンボジアの詩	
6	チュオン・ナート (国語学者)	1883 - 1969	家族と住まい	チュオン・ナート (国語学者)	1883 - 1969	恩人
7	クレアン・ムアン (武将)	16世紀	愛国心	ドーン・ベン	14世紀	変する
	ドーン・ベン	14世紀	国の誇り	クレアン・ムアン (武将)	16世紀	同上
				チュオン・ナート (国語学者)	1883 - 1969	私たちの将来の夢
				シハヌーク元国王 (独立の父) <写真>	1922 - 2012	成功への希望
			シハヌーク元国王 (独立の父)	1922 - 2012	同上	
8	ポー・コンバオ (抗仏の志士)	19世紀	忠誠	クロム・ゴイ (詩人)	1865 - 1936	誇り
	クロラーハオム・コン (抗仏の志士)	19世紀	同上	チュオン・ナート (国語学者) <写真：銅像>	1883 - 1969	同上
				チュオン・ナート (国語学者)	1883 - 1969	同上
				サントー・モック (詩人)	19 - 20世紀	同上
				クロラーハオム・コン (抗仏の志士)	19世紀	同上
				デチャー・ミアハ、ヨート (武将)	17世紀	信頼

9	チュオン・ナート (国語学者)	1883 - 1969	人間の優美	アン (詩人)	1859 - 1924	美しさの価値
	クロム・ゴイ (詩人)	1865 - 1936	同上	クロム・ゴイ (詩人) <写真:銅像>	1865 - 1936	同上
	インドラデヴィ (ジャヤヴァルマン7世紀)	12世紀	同上	クロム・ゴイ (詩人)	1865 - 1936	同上
				セット (詩人)	1881 - 1963	同上
				チュオン・ナート (国語学者)	1883 - 1969	同上
				インドラデヴィ (ジャヤヴァルマン7世紀)	12世紀	同上
				ブン・セン (首相)	1951 -	国の誇り
				シハヌーク国王	1922 - 2012	同上
				ジャヤヴァルマン7世 <写真:彫像>	12世紀	同上
				ジャヤヴァルマン7世	12世紀	同上
				チェイチェッター2世	17世紀	真実を受け入れる
				ドーン・ペン	14世紀	同上
				デチャー・ミアハ、ヨート (武将)	17世紀	責任感
				ジャヤヴァルマン7世 <写真:彫像>	12世紀	努力
	10	サントー・モック (文学者)	19 - 20世紀	変化	チュオン・ナート (国語学者) <写真>	1883 - 1969
クメールの王 (真臘風土記より)		13世紀頃	アンコール帝国の繁栄	シハモニー国王<写真>	1953 -	善良
セット (作家)		1881 - 1963	世界の偉人	クロム・ゴイ (詩人) <写真:蠟人形>	1865 - 1936	良民
11	ジャヤヴァルマン7世	12世紀	同上			
	シソワット・コサマク皇太后 (古典舞踊を整備)	1904 - 1975	カンボジア芸術の美	インドラデヴィ王妃 <写真:彫像>	12世紀	民族の琴線
	ボパー・テヴィー王女 (アプサラダンスの名手)	1943 -	同上	ポー・コンパオ (抗仏の志士)	19世紀	勇気
12				クレアン・ムアン (武将)	16世紀	同上
				デチャー・ミアハ、ヨート (武将)	17世紀	犠牲
	デチャー・ミアハ、ヨート (武将)	17世紀	良民	ブンラニー・フンセン首相夫人 <写真>	1954 -	崇拜
			チュオン・ナート (国語学者) <写真>	1883 - 1969	仏教文学	
			デチャー・ミアハ、ヨート (武将)	17世紀	演劇	

補足：功績について説明のある人物のみ取り上げた。肩書きについては、教科書で説明されている通り。

<写真><挿絵>がある場合は再掲した。生没年は [Khing 2007][岩波書店辞典編集部 2013] による。なお、旧版、新版とも1 - 3年生用には偉人に関する記述はなかった。

1999 - 2002年に発行された教科書(以下、旧版)では、チュオン・ナートやクロム・ゴイはもちろんのこと、1960年代、70年代に活躍し現在でも人気の高い歌手シン・シーサモット、画家のニユック・ダム、カンボジア文字タイプライターを作ったイウ・カウフが掲載されている。また存命中の人物でありながら取り上げられている希少な例として、建築家ヴァン・モリヴァン、古典舞踊の名手ボパー・テヴィー王女がいる。またその他の女性ではインドラデヴィ王妃³⁵⁾、作家のセット、挿絵のみではあるが歌手ロ・スレイソティアが掲載されている。

一方2010 - 12年版(以下、新版)³⁶⁾の11、12年生は教科書のタイトルが『カンボジア語』から『カンボジア文学』に変更された。4年生では偉人に関する記述はなくなり、取り上げられている人物の多様性はなくなっているものの、のべ掲載回数は大幅に増加している。課のタイトルとの関連性では、旧版にあった「才能と芸術家の業績」「古典芸能」「カンボジア芸術の美」といった芸術に関するものは見られなくなり、「素晴らしい偉人」「誇り」「責任感」「努力」といった偉人の資質を表象するものが増えている。取り上げられている人物としては、ジャヤヴァルマン7世、インドラデヴィ王妃、チュオン・ナート、クロム・ゴイ、ドーン・ペン、クレアン・ムアン、デチャー・ミアハ、ヨートはそのまま引き継がれている。カンボジア語や文学につながるの深いチュオン・ナートやクロム・ゴイは旧版よりも多く登場し、また中でもク

レアン・ムアン、デチャー・ミアハ、ヨートのようにポスト・アンコール期の武将が繰り返し掲載されているのが特徴である。特に中等教育になると、10年生を除き、デチャー・ミアハ、ヨートの物語が各学年に掲載されている。

3. 武将デチャーの物語

では銅像が建立され、国語教科書での掲載が増えた武将デチャーとはどのような人物なのか。「デチャー」は、カンボジア語国語辞典で「権威によって戦勝すること」とされているが、現在のカンボジア語では、通常は職位名として使用されている。この職位を持つ歴史上の著名人は、アンコール王朝時代のデチャー・ダムデンとポスト・アンコール時代のデチャー・ミアハ、デチャー・ヨートの3名である。いずれも史実と伝説が混じり合った英雄物語の主人公として、歌劇風の 대중芸能パサック劇や映画の題材となり、人々の間に浸透している³⁷⁾。

3.1. デチャー・ダムデン物語のテキスト

デチャー・ダムデンの物語は、1878年にヌパラット王子によって編纂された年代記³⁸⁾の伝説部分と歴史部分のうち、前者にみられる。また1952年にまとめられた『デチャー・ダムデン物語』全7巻は内戦中に失われ、現在では、国立博物館にそのうちの3巻が残るのみである³⁹⁾。

あらすじは次のようなものである。プレアハ・ケート・ミアリア⁴⁰⁾の王子が即位した時代、ナーガの娘である王妃が卵を産み、その卵から生まれた人間の子をタイ人の国司が拾ってナーイ・ロンと名付ける。ナーイ・ロンは特別な力を持ち、何か望みを口で言うと、それが叶う。カンボジアの王はデチャー職にあるダムデンにナーイ・ロンを討伐を命じる。呪術で地下に潜ることができるデチャー・ダムデンは、ちょうどナーイ・ロンが出家し止住していた寺の前で地表に出るが、ナーイ・ロンの呪術にかかり、石像となってしまう。その後、ナーイ・ロンはタイの王となり、何度かカンボジアの王位を奪おうとするが、叶わず、デチャー・ダムデンの石像がなくなったときにカンボジアの国は滅びるであろうと予言した、という物語である。2001年にはモロドック・プロダクションにより映画化され、大ヒットした⁴¹⁾。

3.2. デチャー・ミアハ、デチャー・ヨート物語のテキスト

デチャー・ミアハ、デチャー・ヨートの物語の概要は次の通りである。17世紀、王につながりを持つ者たちがは、勢力争いのためにベトナムやタイに各々支援を求めていた頃、現在のコンポントム州に当たる地域にデチャーという職位を持つミアハという武将がいた。スラエンという名の妻がいたが、子はなく、夫婦は少数民族出身の孤児ヨートを弟子として養っていた。

デチャー・ミアハとヨートは軍を率いてタイの侵略を防ぎ、また王位を狙う豪族ソムラエや裏切り者を討伐する。デチャー・ミアハの死後、デチャー・ヨートがその跡を継いで領土を守り、スラエンと結婚する。

この物語の見せ場ともいえる場面は、次の 3 場面である。①デチャー・ミアハが側妻の縫い物針を怖がったことを恥じて自死する、②デチャー・ヨートが部下の忠誠を確かめるために伐採した竹の運び方を見る、③デチャー・ミアハの妻スラエンは、未亡人となってデチャー・ヨートから求婚されたものの、ヨートの出自が賤しい、夫の部下である、との理由から拒否したが、日常で使用している階段の板で作られた亡夫の像を拝んだことから出自は関係なく現在が大切であると改心し、デチャー・ヨートの求婚に同意する、というものである。

デチャー・ミアハとデチャー・ヨートに関する物語のテキストは、現在入手できるものとして、エーン・ソットの『カンボジアの英雄たち』(1969)、ティエ・チーフオトの戯曲『デチャー・ヨート』(1982)、コン・ブンチュアンの小説『デチャー・ミアハ、デチャー・ヨート』(2002)、チェン・ダラーの韻文小説『赤首のネアク・ター』(2010) がある。

『カンボジアの英雄たち』は、「あとがき」によれば、地方のさまざまな寺院に残されていた王朝年代記や資料をもとに、カンボジアの歴史を全 76 号からなる冊子にまとめたもので、全 1216 頁、現在は全 7 巻に合本されている。第 1 号は 998 年の歴史から始まっており、最終号の第 76 号は 1860 年のノロドム王に関する記述である。同書は王族の歴史のみならず、それ以外のカンボジア人の功績も削除せずにまとめた、という点でいわゆる王朝年代記とは異なっている、また同書に記述されたポスト・アンコール時代の物語は「マクワウリ王」⁴²⁾の伝説以外は史実である、としている。この中でデチャー・ミアハとデチャー・ヨートの物語は第 35 号から第 43 号、550 - 681 頁にあり、デチャー・ミアハの幼少時からデチャー・ヨートがスラエンと結婚したところまでである。カンボジア語の有力紙であるコ・サンテピアップ紙の 2012 年 8 月 9 日付の記事「デチャー・ミアハ、デチャー・ヨート像が近日中に設置される」⁴³⁾も、同書から引用して説明している。同書がデチャーの物語を参照するのに一般的なテキストであることがわかる。

コン・ブンチュアンの作品はいわゆる歴史小説である。「序」の頁で、ふたりの武将は「17 世紀の非常に有名なカンボジアの英雄」であり「彼らの思想と理想の素晴らしさは現在にまで鳴り響いている」としている。作品は「当時の国家的な英雄が敵に戦勝するためにどのような戦術をとったのか、後世のカンボジア人に伝えるため」に執筆された。コン・ブンチュアンは 1950 年代から小説家として多くの作品を世に出してきた人気作家であり、2000 年に東南アジア文学賞を受賞している。だがプノンペンで 1999 年に起きた政府高官の妻による硫酸傷害事件を小説『マリナの運命』として 2000 年に発表したことが発端となり、脅迫を受けるようになった。

た。同年タイに逃れ⁴⁴⁾、2005年にノルウェーに政治亡命している⁴⁵⁾。

チェン・ダラーの作品は、ネアク・ターと呼ばれる土着の精霊のひとつである「赤首のネアク・ター」になった武将デチャー・ミアハの物語を中心に韻文形式で語られる。この作品は『カンボジアの英雄たち』に依拠していることを物語の冒頭で明示しており、また参考文献として2001年発行の国語教科書12年生も挙げている。

ティー・チーフオトの作品は全18幕からなるバサック劇の戯曲である。国営ラジオ放送で1980年代に数度に渡って放送され⁴⁶⁾、娯楽の少ない当時、大変な人気となった⁴⁷⁾。現在、テキストとしてあるのはビー・クムサエンが編集し、2004年に私家版として出版したもののみである。ティー・チーフオトはバサック劇の他、大小の太鼓のリズムとともに歌と踊りで古典物語が進行するジケー劇や、太鼓を主とする楽器の演奏に合わせて男女が掛け合いで歌うアヤイ劇などの大衆歌劇、現代劇、ほかにも歌謡曲や小説などの作品を量産している⁴⁸⁾。

これまでデチャー・ダムデン、デチャー・ミアハ、デチャー・ヨートの3名の物語を見てきたが、いずれもタイと戦う武将という点で共通している。武力だけでなく呪術をも使ってタイと戦ったものの、負けて石像となった伝説的なデチャー・ダムデンの物語よりも、知慮と武力を駆使する物語、さらには出自は高貴でなくとも努力と才能によって偉勲を立てる物語の方が国民的な偉人の物語として完結しており受け入れやすい。またテキストも豊富にあることから、デチャー・ミアハ、デチャー・ヨートが選択されたと考えられる。

3.3. 国語教科書に見られるデチャー物語

国語教科書に採用されているのは上記のティー・チーフオトの作品で、はじめて掲載されたのは旧版12年生である⁴⁹⁾。その理由はいくつか考えられる。全体が18幕で構成されており、しかも1幕ごとの分量が少ないので、編集をせずとも掲載することが容易である。また内容の点から見ても、他の作品と異なり「教育的」とみなされているからである。同作品のみが、デチャー・ミアハは側妻を持たず、よって自死もせず、死因はソムラエの殴打の衝撃によるものとしており、妻スラエンだけを心から愛し、国のために命を落とす男性として描かれている。また他の作品では「シャム」としているが、この作品のみ「タイ」という現代の国名を使用している。1980年代に発表された他の作家の作品と比較しても、「米帝」や「中国覇権主義」というような当時のイデオロギー色の濃い語彙は使われていない。その他、文学ジャンルとしてのバサック劇の紹介が可能であること、また作家がすでに鬼籍に入っており、作家や作品への文学的な評価が定まっている、という点が国語教科書に採用する作品として最適なのである。このテキストの編者であるビー・クムサエンが新版教科書9、11、12年生の執筆委員会のメンバーに入っていることも影響しているだろう。

【表 4】は、各学年の教科書で抜粋されている箇所とその内容である。

【表 4】掲載箇所

幕	内 容	12年生(旧)	12年生	11年生	9年生	8年生
		良 民	演 劇	犠 牲	責任感	信 頼
1	ミアハ、ヨートがソムラエ討伐に出発		○	○	○	
5	ソムラエが側近ピビアとスラエン夫人を娶る相談をする	○		○		
6	スラエン夫人と使用人	○		○		
7	ソムラエがスラエン夫人を訪問する	○		○		○
8	ミアハの遺言と死					○
11	ヨートが部下の忠誠心を確認する			○		
15	スラエン夫人からヨートへの戦勝に対する祝福		○			
16	下女マイのヨートへの想い		○			
17	ヨートと側近プロムスライの謀		○			
18	スラエン夫人の覚醒と結婚の承諾		○			

ピーは、「まえがき」で同作品はバサック劇を学ぶのみならず、「責任感を養う」作品であり、特に「正義、国家、国民のために勇気をもつよう」啓蒙できる作品であるとしている。これは作品が掲載されている教科書の課のタイトルに反映されている。

旧版 12 年生では、「第 8 課 良民」の中の「読み物」として 3 幕分が掲載されている。この課では「国家を防衛し建設に参加する上で、男女とも良民たるものの義務と役割」を学ぶとされている。

新版では、8、9、11、12 年生に掲載されている。11、12 年生では、主要な部分を物語の前半、後半にわけて 2 年間で全体を学ぶようにカリキュラムが組まれていることがわかる。

8 年生の「第 8 課 信頼」では、「自分自身に対する自信と、信頼すべき相手への信用についてとりあげた文章について学ぶ」とされている。バサック劇に使用される語彙とバサック劇の特徴が作品の抜粋を交えて説明される。次に難解な語彙とキーワード一覧が出され、最初の単語として「デチャー」は「(名詞) 権力、力、威力。たとえば、デチャー・ミアハ。強い権力、威力を持つ者を表す」とある。9 年生では、「第 6 課 責任感」として、「決心すること、いろいろな事柄、人に対する責任感を学ぶ」となっている。大きく掲載されているのは、帰属をめぐってたびたびタイとの紛争がある世界遺産プレアヴィヒア寺院に立つ銃を持ったカンボジア兵の写真である。9 年生では「第 2 課 誇り」の「読み物」として 2008 年にプレアヴィヒア遺跡が世界遺産に登録されたこと、それには 2001 年よりフン・セン首相がユネスコに嘆願書を出していたことなどが解説された文章が掲載されている。11 年生では、「第 4 課 犠牲」として「国家の危急のために国民として犠牲を払うことについて学ぶ」とある。具体的な説明として「国のために犠牲を払うことのできる個人を英雄とよぶ。国のために犠牲を払うことのできる国民がたくさんいれば、その国は必ずや繁栄が続き、急速に発展するであろう」とある。ここにも上記と同一のプレアヴィヒア遺跡と兵士の写真が掲載されている。12 年生では、「第 5 課 演

劇」として「演劇はそれぞれの民族のアイデンティティーを明示する芸術のひとつ」と説明され、カンボジアには数多くの演劇があることを説明している。また「現在でも演劇は、国民の多く、とくに年配の人々から愛されている」とし、「カンボジア国民として私たちはこのアイデンティティーをいつまでも大切にし、また発展させていく必要がある」としている。

これらの抜粋された作品の中で、特に偉人として描写されているのは次のような場面である。第1幕では、デチャー・ミアハが妻スラエンとの別れのシーンで「国のために命を失うことは大きな名誉だ」という。また、第8幕のデチャー・ミアハが息を引き取る場面では、側近が「あなたはカンボジアの偉人です。何度も国を危機から救って下さった—中略—あなたの名声はいつまでも続くでしょう」という。第18幕では、スラエンがヨートのことを、「生まれは少数民族でも、気持ちには強い愛国心がある。このカンボジアの国の歴史に残るような勇敢さが」と述べている。また同じく第8幕で、ヨートはミアハにタイの王を国境まで追い詰めたときのことを思い出すように言われ、「先生は、あのタイの王のような愚かな敵は生かしておいてやればよいのだと、言われました」と言っており、国家の敵がタイであることを明言している。

作品が国語教科書に掲載されている課との関係を見ると、旧版で見られた「良民」での掲載は新版ではなくなり、代わりに「演劇」「犠牲」「責任感」「信頼」で掲載されている。デチャー・ミアハ、デチャー・ヨートが「一人の良き国民」であることよりも、自らを犠牲にし、責任感と信頼のおける人物、さらには命を懸けて国をタイから守る偉人であるということが読み取れる。

4. 新たな偉人の創出

だが実際には、デチャー・ミアハ、デチャー・ヨートの知名度はさほど高くないのが現状である。演劇や高校の授業でしか名前を聞いたことがなく、また史実ではなくフィクションであると考える人が多いという⁵⁰⁾。

『カンボジアの英雄』では、実在した王の在位した時系列に沿った形で物語が展開するので、ふたりは歴史上の人物のように読める。だが、現在でもカンボジア国内で権威のあるトラン・ギア『クメール国史』(1973)や、王朝年代記ヌパラット本には、デチャー・ミアハ、あるいはデチャー・ヨートに関する記述は見られない。よって現在使用されている国定歴史教科書にも記述はない。

カンボジア人有識者の意見もさまざまである。歴史学者ミシェル・トラネは、「カンボジア社会では、伝説と本当の歴史が混在してしまっているものの、この二人の人物については史実に基づいている」と述べている⁵¹⁾。また東南アジアの歴史に詳しい政治家スン・ソベールは、歴史上に実在するデチャーについては「その幾人かについての歴史についてはあまり明らかになっていない」としている⁵²⁾。

プノンペン市は、2012年8月29日付の公報⁵³⁾で「2012年9月1日、ウナロム寺院前広場にて除幕式が行われ、メーン・ソムオーン副首相兼国会対策大臣がフン・セン首相代理として出席、69名の僧侶が出席する」こと、またこの除幕式は、「敵から我が国を守るために努力と犠牲を払った二人の武将の愛国心と勇気を想起するための式典である」ことを伝えた。除幕式の出席者やその数からも、特別な扱いであることがわかる。

ではなぜこのようにデチョーの物語を国民に浸透させようとするのか。それは、現在、デチョーと呼ばれている首相フン・センと物語をシンクロさせるためにほかならない。国語教科書に掲載されたデチョーの物語は、現代のデチョーであるフン・センが、首相としての職務を賭してプレアヴィヒア遺跡をタイから守った者、と読み替えが可能である。

フン・センは、正式にはソムダイ・アケア・モハーセナーパダイ・デチョーとの職位を持っている。マスメディアでは、略してソムダイ・デチョー、あるいはデチョーと称されることも多い。この職位は、2007年10月12日に国王シハモニから授与された⁵⁴⁾。内閣広報誌『カンボジア新視点』によれば、この職位の授与の理由はフン・センが「国民に愛され、国家的な平和、安定、統一、あらゆる分野での経済と発展をもたらし、民主主義を遵守、積極的な国際協力を達成、国家の独立性を維持、領土保全を行い、それはサンクム・リアハ・ニヨム⁵⁵⁾時代の繁栄を踏襲し、仏教および他の宗教を尊重、広め、王に忠誠心を持ち、そしてカンボジア王国の王室の持続性のために正義を貫いてきたという意味で特別な指導者である」⁵⁶⁾からだという。

1985年から30年近く首相の座にあるフン・センは、カンボジア中部のコンポンチャム州出身で1970年代より軍人であった。「栄光のアンコール」に結びつく王の系譜にはつながらず、ともすれば元クメール・ルージュといった外聞の悪いタイトルがついてしまう。そこで国王から授与された職位と同じ職位を持つ歴史上の偉人と重ねあわせ、史実としての信頼性が低いことを逆手に取って、新たな偉人像を創造しようとしているのではないだろうか。既述のようにカンボジアでは生存中の人物の銅像を作ることはできないため、現代のデチョーの「偉業」を投影できる銅像を建立し、その功績はナショナルアイデンティティの獲得に重点を置いた国語教科書で説明されているのである。

耐久的で永続的な記憶装置である記念碑や銅像は、記念日を中心とした顕彰行為とともに、公的記憶を再生産・変容させる⁵⁷⁾。ベトナム友好記念碑、クメール・ルージュの犠牲となった人々の慰霊塔、橋上事故慰霊塔、そしてシハヌーク元国王像では、それらの記念碑、像が想起させる出来事に関連した記念日に、政府による行事が行われている⁵⁸⁾。しかしデチョー像には記念日がなく、従って定期的な顕彰行為もない。よってそれを補うために、さまざまなメディアを使った再生産が行われている。その最たるものが国語教科書を通じた公的記憶の定着であろう。また、1997年頃から、フン・セン個人の財政的支援があった公立学校では、既存の学校

名に加えてフン・センという名前が付けられている⁵⁹⁾。2012年には、政府寄りとされているCTN テレビで、ボンルー・アテット・プロダクション制作のドラマ『オクニャー・リアムリアチ・デチャー・ヨート』が、全32回の連続ドラマとして放送された⁶⁰⁾。同ドラマの撮影に対しては、フン・セン首相が激励の書簡をボンルー・アテット・プロダクションに送っている⁶¹⁾。また2013年3月のCTN テレビの10周年記念番組では現代劇『デチャー・ヨート』が放送された。

おわりに

政府をあげてデチャー・ミアハ、デチャー・ヨートにフン・センを重ね合わせようとするのは、偉人としての系譜を新たに創造するだけでなく、ベトナムとの政治的なつながりが強い、との国民からの批判を回避し、注目すべきはタイであるという「タイ人の他者化」⁶²⁾を促進させる目的もあるだろう。

『カンボジアの英雄たち』では、デチャー・ヨートが、自分とデチャー・ミアハ、スラエンの3人の像を各地に設置し、コンポントム州の人々は現在でもその像が霊験あらたかであると信じている、というところでデチャーの物語は終わっている。現代のデチャー・ミアハ、デチャー・ヨート像は、彼らが活躍したといわれるカンボジア中部地方ではなく、プノンペンの中の「パンテオン」に設置された。それは「首都であるからこそ、『真にナショナル』」⁶³⁾な意味を持つ「偉人」となったからである。除幕式の際にはジャスミンの花輪が像の首にかけられ、供物、線香が捧げられたものの、現在ではこのデチャー像に対して一般市民からそのような宗教性を帯びた行為は行われていない。

1960年代、シハヌークは自ら達成した独立と近代国家としての繁栄を、アンコール王朝最盛期と王ジャヤヴァルマン7世になぞらえたが⁶⁴⁾、ジャヤヴァルマン7世像が公共空間に建立されることはなかった。現在では、セメント製のジャヤヴァルマン7世の坐像や頭部像がホテルや寺院の境内など国内各地に安置されている⁶⁵⁾。カンボジアで最も歴史のある高等教育機関である王立プノンペン大学構内入口にも1995年に設置され、また頭部像は文化芸術省のシンボルマークとなり、野党サムレンシー党のインターネットテレビのニューススタジオにも坐像が飾られている。今やジャヤヴァルマン7世は、文化、知性、そしてカンボジアの魂、統一の象徴となっている⁶⁶⁾。プノンペン市によって銅像が建立されたチュオン・ナートは、かつてクメール共和国時代に学識の象徴、国語を刷新した偉人として位置づけられ、肖像の入った切手も発行された⁶⁷⁾。1999年には死後30周年記念行事が仏教研究所で開催され、現在では広く仏教寺院で偶像化されている⁶⁸⁾。たとえば2010年にはプノンペン市内のワット・タン寺院附属図書館内に有志の手で銅像が設置されている⁶⁹⁾。一方、街路の名称だけではなく、銅

像としてあらためてパンテオン入りしたシハヌーク元国王は、早くも「神格化」されている。プノンペン市からの違反建築物の取り壊し命令を不服として、一般市民がこの銅像のミニチュアを懸案の建築物に設置したのは、その一例であろう⁷⁰⁾。

今後、カンボジアの「国家的偉人」の新たな創造と、それを公的記憶としてどのように再生産されていくのか、また国民がどのように受容していくのか、引き続き注目していきたい。

注

- 1) アスマン [2011:171-180] では、変遷する国家の首都であったベルリンの街路や広場の名前から歴史の層すべての存在を確認できると指摘している。
- 2) Wild Cambodia Press & Douglas beatle の絵葉書。「カンボジア・ベトナム記念碑」「独立記念塔」「チューン・アエク虐殺記念塔」「カンボジア仏教指導者ソムダイ・チュオン・ナート」「銃口を結んだ銃の像」とそれぞれについて簡単な説明が付けられている。
- 3) Edwards 2007:251.
- 4) Reyum 2001:11.
- 5) カンボジアにおける道路名称の変遷から政体変容が首都のあり方にどのような変化を与えたのかについては、加藤 [2009] の研究発表がある。
- 6) គណៈកម្មការរៀបចំសន្និសីទនិងអត្ថបទវិជ្ជាពលរដ្ឋ ១៩៧១
- 7) Edwards 2007:251-252.
- 8) 前者については [Edwards 2007][Muan 2001]、後者は [早瀬 2012][Nepote & Khing 2005] を参照。
- 9) チャンドラー 1994 : 240-241. 胸像はプノンペン市内のツールスレン大量虐殺犯罪博物館に展示されている。
- 10) チャンドラー 2002 : 100.
- 11) Kubeš [1982:195] では、「独立記念塔」というキャプションで写真が紹介されているが、カンボジア情報省発行の 1 月 7 日 10 周年記念書籍 *Kampuchea Today* [1988:24] では、「戦勝記念塔」と紹介されている。また 1990 年代初頭に市販されていた Asia Books 発行プノンペン市内地図 *Periplus travel maps Cambodia* にも「戦勝記念塔」としている。
- 12) People's Republic of Kampuchea, Ministry of Information and Culture 1988:151.
- 13) 高山 2009:102-105.
- 14) 平山 2014:66.
- 15) 1995 年に開館したハノイの女性博物館のエントランスに設置されている母子像とも類似点が見られる。
- 16) PPP 1997 年 6 月 13 日。
<http://www.phnompenhpost.com/national/pm-sheds-no-tears-over-statue-attack>
(最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 17) People's Republic of Kampuchea, Ministry of Information and Culture 1988:152. これと似ているのがベトナムのドンナイ省に建立された「抗クメール・ルージュ戦争で犠牲となったカンボジア・ベトナム戦士のための記念碑」である。2012 年 1 月 2 日にベトナムを訪問していたフン・セン首相がベトナムのグエン・タン・ズン首相とともに除幕式に出席した。RFI 2012 年 1 月 2 日。
http://www.khmer.rfi.fr/Hun_sen_inaugurate_stupa_for_cambodian_and_vietnamese_soldiers_died_in_cambating_khmer_rouge (最終閲覧 2014 年 5 月 11 日)
- 18) Deth 2011.
- 19) Reuters 2007 年 7 月 29 日

- <http://www.reuters.com/article/2007/07/29/us-cambodia-bombs-idUSSP10595320070729>
 (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)。1997 年 5 月 31 日に港湾都市シハヌークヴィルにあった同様の記念像が爆発物で破壊された。その際、当時のノロドム・ランナリット第一首相はプノンペンベトナム友好記念塔も撤去すべき、との発言をして物議を醸した。PPP 1997 年 6 月 13 日、前掲。
- 20) Choeng Ek Genocidal Center <http://www.cekillingfield.org/index.php/en/>
 (最終閲覧日 2014 年 2 月 16 日)
- 21) Fawthrop & Jarvis 2004:74.
- 22) インフォーマント (1963 年プノンペン生まれ、男性) へのインタビューによる。1975 年ー 1979 年の民主カンボジア時代 (いわゆるボル・ポト時代) については、インフォーマントがプノンペンに在住していなかったため、また 1989 年ー 1993 年のカンボジア国時代については、カンボジア人民共和国時代と同様であるため、表からは省いた。
- 23) *ibid* 2000:83.
- 24) 前掲書 88,91。現在、ヴィシヌヌ神像は撤去されている。
- 25) 2008 年から 2013 年までの電子版 PPP、RFA、KSP の情報による。
- 26) RFA 2008 年 5 月 17 日。
http://www.rfa.org/khmer/indepth/king_praised_PPenh_authorities-05172008000429.html
 (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 27) KSP 2013 年 4 月 28 日。 <http://kohsantepheapdaily.com.kh/article/68992.html>
 (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 28) 没後の正式王名は「ブレア・パロム・ラタナ・カオト」、生没年は 1922 年 10 月 31 日ー 2012 年 10 月 15 日である。
- 29) 2004 年にシハヌークが退位した後、国会が授与したタイトル。PPP 2012 年 10 月 23 日。
<http://www.phnompenhpost.com/national/last-khmer-god-king> (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 30) 高山 [2009 : 130]。これと対照的なのが「労働者の英雄」チア・ヴィチア像建立のケースである。賃金値上げ要求など労働組合活動を行っていたリーダー的存在のチア・ヴィチアは、2004 年 1 月 22 日、何者かに射殺された。2006 年に一般市民のグループが銅像建立の申請を行い、2012 年に市当局から許可が下り、2013 年 5 月 3 日に事件場所に近い公園に設置された。像は 1.68 メートルの等身大の銅像が 1 メートルほどの台座に乗ったものである。PPP 2013 年 4 月 22 日。
<http://www.phnompenhpost.com/national/groundbreaking-held-chea-vichea-statue>
 (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日) 及び Radio Australia
<http://www.radioaustralia.net.au/khmer/radio/onairhighlights/983198> (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)。
 事件から 10 年目の 2014 年 1 月 22 日には、銅像を終点とする市民によるデモが行われた。
 PPP 2014 年 1 月 23 日。 <http://www.phnompenhpost.com/national/memorial-plea-end-violence>
 (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 31) プノンペン市公式サイト <http://www.phnompenh.gov.kh/district.php> (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)。
- 32) Edwards [2007:255] でも指摘しているように、偉人の展示場として 2003 年に開館したシエムリアブ市にあるカンボジア文化村内の蠟人形館がある。展示されているカンボジア人の著名人は次のとおりである。ジャヤヴァルマン 7 世とインドラデヴィ王妃、クロラハオム、アンドゥオン王、ノロドム・スラムリット王とコサマク王妃、ペン・ヌート、チュオン・ナート、クロム・ゴイ、シン・シーサモットとロホ・スレイソティア。いずれもプレートには名前と生没年、あるいは時代が書かれているのみで、主要な功績が何であったのかの情報はない。なおクロラハオムは人名ではなく職位名である。時系列的な人形の設置場所と背景画からポスト・アンコール期に活躍した武将であることがわかる。
- 33) RFA 2010 年 6 月 18 日。2010 年 6 月 16 日に反汚職ユニット長が、フン・セン像を同オフィスに設置したことから、批判が高まり、同ユニット長が首相に対する謝罪状を公開、直ちに像を撤去した。これに伴い内閣府が銅像塑像禁止令を出した。同ユニット長は、「フン・セン首相に対する個人的な敬愛

- の念」から「首相には無断で」像を作って設置しようとしたという。
<http://www.rfa.org/khmer/indepth/corruption-06182010025849.html> (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 34) 初等教育では、週 27～30 コマ (1 コマ 40 分) の授業のうち、1 年生 13、2 年生 13、3 年生 13、4 年生 8、5 年生 10、6 年生 10 コマである。中等教育前期では、週 32～35 コマ (1 コマ 50 分) のうち 6 コマで、数学、科学、社会と同数、11、12 年生は、文学という科目になり、週 32 コマの中で必修科目文学 (6) 数学 (4)、外国語 (4)、体育 (2) となっており、最も時間数が多い。
- 35) インドラデヴィ王妃の理想化については、笹川 [2006:212-214] を参照。
- 36) 全学年の教科書の改訂版が同時期に発行されるわけではない。2010 年に改訂されたのは 3、5、8、10、11 年生、2011 年は 1、2、4、7、9、12 年生、2012 年は 6 年生である。
- 37) Reyum 2001:170.
- 38) 坂本 [2006] には、日本語訳のほか詳細な訳注、人名事典、事項事典、系図がある。
- 39) Khing Hoc Dy の 2014 年 3 月 8 日の私信による。
- 40) インドラ神の子で、地上に降臨し、インドラ神の命により、プレアハ・ケート・ミアリアのために建てられた石造建築が現在のアンコール遺跡である、とされている [笹川 2006:55]。
- 41) PPP 2001 年 6 月 8 日。 <http://www.phnompenhpost.com/national/film-epic-taps-old-animosities>
 (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 42) 王のマクワウリ畑の番をしていた男が、畑に入ってきた王を闖入者だと誤解して殺してしまい、王となる。ヌバラット本では、伝説部分の最後にある。
- 43) <http://kohsantepheapdaily.com.kh/article/50129.html> (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 44) 2001 年にはヒューマン・ライツ・ウォッチから政治的迫害の犠牲者であり、財政的な支援が必要な作家に与えられるヘルマン / ハメット助成金を受けている。
<http://www.hrw.org/news/2001/06/27/persecuted-writers-honored-prestigious-awards>
 (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 45) The free press magazine and radio 2013 年 7 月 2 日
<http://www.fpmonline.net/article/27867> (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 46) វិចិត្រ 2004:7.
- 47) វិចិត្រ វិទ្យាសាស្ត្រ, 1999 年 5 月 12 日 『『デチャー・ヨート物語』の作者の遺族を訪ねて』。また複数のカンボジア人へのインタビューから、1980 年代半ばごろまで、地方では公共の場に設置された拡声器から国营ラジオ放送が流され、娯楽の少ない当時、非常に人気のある番組だったという。
- 48) វិចិត្រ 2004:1-6.
- 49) វិចិត្រ 2004:៩.
- 50) sabay 2012 年 9 月 1 日。 <http://news.sabay.com.kh/articles/295179> (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 51) 前掲。
- 52) RFA 2012 年 9 月 1 日。
http://www.rfa.org/khmer/indepth/2hero_statues_inaugurated-09012012230635.html
 (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 53) プノンペン市公式サイト
<http://www.phnompenh.gov.kh/news-on-the-inauguration-of-the-two-warriors-statues-of-decho-meas-and-decho-yot-3409.html> (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 54) Cambodia New Vision. 1993 年には、当時のシハヌーク国王から、「国の和解、平和、そして社会経済発展に対する大きな努力と貢献」を称え、ソムダイの職位が与えられている。
http://cnv.org.kh/en/?page_id=38 (最終閲覧日 2014 年 5 月 11 日)
- 55) 1960 年代のシハヌークが提唱した「人民社会主義共同体」
- 56) Cambodia New Vision. 前掲。
- 57) 和田 2005:115.

- 58) 2014年の外務省のカレンダーによると、国家によって定められた記念日のうち、世界共通、仏教行事、また王家に関するもの以外では、憲法記念日、独立記念日、パリ和平協定調印記念日、虐殺政権に対する戦勝の日がある。<http://www.mef.gov.kh/public-holiday.html> (最終閲覧日 2014年5月11日)
- 59) The Cambodia Daily. 2003年6月9日。
<http://www.cambodiadaily.com/archives/ubiquitous-hun-sen-schools-raise-ethics-issues-28940/>
 (最終閲覧日 2014年5月11日)。また教育青年スポーツ省発行の『2012年度教育報告書』では、2012年末までにフン・セン首相夫妻が3,518棟、18,256教室分相当の校舎を寄贈したとしている。
- 60) youtubeに投稿されたផលិតកម្មព្រឹត្តិការណ៍អាទិត្យ制作のរឿងឧកញ៉ាវាមាជគេងោយ៉ាតにより確認。
- 61) <http://kohsantepheapdaily.com.kh/article/2140.html>
- 62) 笹川 2006:195-198.
- 63) 光永 1999:87.
- 64) Edwards 2007:247,250.
- 65) 笹川 2006:238-240.
- 66) The Cambodia Daily. 2007年2月9日。ジャヤヴァルマン7世に対する評価については、シハヌークとケン・ヴァンサックの論争がある。
<http://www.cambodiadaily.com/archives/controversy-over-jayavarman-vii-goes-to-heart-of-khmer-identity-1169/> (最終閲覧日 2014年5月11日)
- 67) Edwards 2007:252. たとえば2010年にはプノンペン市内の寺院附属図書館内に銅像が有志の手で建てられている。
- 68) Edwards 2007:254.
- 69) KSP 2010年9月27日。<http://kohsantepheapdaily.com.kh/article/3438.html>
 (最終閲覧日 2014年5月11日)
- 70) The Cambodia Daily. 2014年4月22日。
<http://www.cambodiadaily.com/news/sihanouk-statue-waves-down-on-royal-palace-56896/>
 (最終閲覧日 2014年5月11日)

文献略語

KSP Koh Santepheap
 PPP Phnom Penh Post
 RFA Radio Free Asia
 RFI Radio France International

参考文献

- アスマン、アライダ 2011
 『記憶のなかの歴史—個人的経験から公的演出へ』磯崎 康太郎訳、松籟社
 岩波書店辞典編集部 2013
 『岩波世界人名大辞典』、岩波書店
- オズーフ、モナ 2003
 「パンテオン 死者たちのエコール・ノルマル」長井伸仁訳『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史—』第2巻、pp.105-137.
- 加藤剛 2009
 「名づけの文化政治学—カンボジアの政体変容と首都プノンペンの道路名称の変遷をめぐって」第42回東南アジアの社会と文化研究会
- 坂本恭章訳、上田広美編 2006

- 『カンボジア 王の年代記』、明石書店
 笹川秀夫 2006
 『アンコールの近代—植民地カンボジアにおける文化と政治』中央公論新社
 高山陽子 2009
 「社会主義リアリズムの系譜：近代中国におけるモニュメントを中心に」『亜細亜大学国際関係紀要』
 18(1/2), pp.101-136.
 チャンドラー、デービット .P. 1994
 『ボル・ポト伝』山田 寛訳、めこん
 チャンドラー、デービット .P. 2002
 『ボル・ポト 死の監獄 S21—クメール・ルージュと大量虐殺』山田 寛訳、白揚社
 早瀬晋三 2012
 『マンダラ国家から国民国家へ：東南アジア史のなかの第一次世界大戦』人文書院
 平山陽洋 2014
 「ベトナムにおける公式的な戦争の記憶—記念碑と戦争展示をめぐる考察」『地域研究』第 14 巻第 2 号、
 pp.59-74.
 光永雅明 1999
 「銅像の貧困—19-20 世紀転換期ロンドンにおける偉人銅像の設立と受容」『記憶のかたち—コメモレイ
 ションの文化史』柏書房、pp.81-118.
 和田光弘 2005
 「記念碑の創るアメリカ—最初の植民地・独立革命・南部」『記録と記憶の比較文化史』名古屋大学出版会、
 pp.114-164.
 Deth, Sok Udom 2011
 “Remembering 7 January 1979 - A 33-Year Debate in Cambodian Political History” The 5th Thai-
 Malaysian International Conference On Southeast Asian Studies “Re-Making Historical Memory in
 Southeast Asia” 1-2 December 2011
http://www.academia.edu/1453040/Remembering_7_January_1979_-_A_33-Year_Debate_in_Cambodian_Political_History
 Edwards, Penny 2007
Cambodge: The Cultivation of a Nation, 1860-1945, University of Hawaii Press
 Fawthrop, Tom and Helen Jarvis 2004
Getting Away With Genocide: Elusive Justice and the Khmer Rouge Tribunal, Pluto Press.
 Hue-Tam Ho Tai 2001
 “Face of Remembrance and Forgetting” in *The Country of Memory: Remaking the Past in Late Socialist Vietnam*. Hue-Tam Ho Tai ed. University of California Press. pp.167-195.
 Kingdom of Cambodia, Ministry of Education, Youth and Sport 2004
Policy For Curriculum Development 2005-2009
<http://www.moeys.gov.kh/en/policies-and-strategies/policy-for-curriculum-development-2005-2009.html#.U0nDWJqKCcw>
 Kingdom of Cambodia, Phnom Penh Municipality 2005
City Development Strategy 2005-2015
http://www.caexpo.com/special/Magic_City/Cambodia/jbjh.pdf#search='phnom+penh+city+development+policy+2005'
 Kubeš, Antonín 1982
Kampuchea, Prag: Presseagentur Orbis.
 Muan, Ingrid 2001

Citing Angkor: The “Cambodian Arts” In the Age of Restoration 1918-2000, unpublished PhD thesis, Columbia University.

Nepote, Jacques and Khing Hoc Dy 2005

Samapheavi de Rim Kin, Phnom Penh:Angkor.

People’s Republic of Kampuchea, Ministry of Information and Culture 1988

Kampuchea Today, Phnom Penh.

Reyum 2002

Cultures of Independence:An Introduction to Cambodian Arts and Culture in the 1950s and 1960s, Phnom Penh:reyum publishing.

Yamada, Teri Shaffer 2004

“The Spirit Cult of Khleang Moeung in Long Beach, California” in *History, Buddhism, and New Religious Movements in Cambodia*. John Marston and Elizabeth Guthrie, eds. Honolulu: University of Hawaii Press. pp.213-225.

ក្រសួងអប់រំយុវជន និង កីឡា ២០១៣ *សន្និបាតទម្រង់សរុបលទ្ធផលការងារអប់រំយុវជន និង កីឡាឆ្នាំ សិក្សា២០១១-២០១២ និង លើកទិសដៅឆ្នាំសិក្សា ២០១២-២០១៣*

គង្គ ប៊ុនឈឿន ២០០២ *រឿង គេដោមាស គេដោយ័ត* ភ្នំពេញ បណ្ណាល័យ ឆពណ្ណរង្សី,

គណៈកម្មការរៀបចំសន្និសីទនិងអត្ថបទវិជ្ជាពលរដ្ឋ ១៩៧១ *បុណ្យខួបឆ្នាំទី១នៃសាធារណរដ្ឋខ្មែរ*
ក្រសួងអប់រំជាតិនិងវប្បធម៌ ភ្នំពេញ

ចេង តាវ ២០១០ *រឿងអ្នកតាក្រហមក* ភ្នំពេញ : បណ្ណាគារបន្ទាយស្រី

ត្រឹង ងា ១៩៧៣ *ប្រវត្តិសាស្ត្រខ្មែរ* ភ្នំពេញ

ប៊ី គឹមសែន (អ្នករៀបរៀង) ២០០៤ *រឿង គេដោយ័ត* និពន្ធដោយ ទី ជីហួត ភ្នំពេញ

ប៉ែនខុន ២០០០ *ភ្នំពេញមុន និង ក្រោយ ឆ្នាំ១៩៩៧* ភ្នំពេញ

រឹម គឹម ១៩៣៨ *សូដាត*

សួន សុវិន្ទ ១៩៦១ *ព្រះអាទិត្យថ្មីរះលើផែនដីចាស់* ភ្នំពេញ:ពោឃែតព័ត៌មាន

អេង សុត ១៩៦៩ *មហាបុរសខ្មែរ* ភាគទី ៣ ភ្នំពេញ:ពោឃែតព័ត៌មាន

The Creation of National Heroes in Contemporary Cambodia

OKADA Tomoko

This paper examines the creation of national heroes in contemporary Cambodia, by analyzing the evolution of monuments and bronze statues in Phnom Penh on one hand, and selected literary works and Khmer language school textbooks on the other hand.

Since independence in 1953, Cambodia has endured five changes of political regime. We can catch a glimpse of each era through monuments, bronze statues, and names of streets, parks and squares of the current capital, Phnom Penh. In recent years, as the Phnom Penh Municipality has erected one new statue after another following the policy of protection and creation of Khmer culture and national identity, part of Phnom Penh has become a “Pantheon.” The achievements of national heroes, however, are not provided on explanation boards attached to the statues. Instead, they are chronicled in Khmer language textbooks, in a new edition compiled by the Ministry of Education, Youth and Sports. This reflects the policy requiring that students acquire a deep knowledge of their national identity through their curriculum.

The paper explores the two cases of Decho Meas and Decho Yort, two military commanders in the battle against the Thai in the post-Angkorian period. Their statues were erected in the “Pantheon” amid various theories as to whether they actually existed. “Decho Yort,” a drama written by Ty Chi Huot, one of the most famous writers in the 1980s, was adopted for national textbooks. The stories highlight how the two commanders were capable, reliable, and willing to sacrifice themselves for the nation, defending it against the Thai invasion. Currently, a variety of media such as newspapers and movies portray the story of these heroes. This phenomenon arguably reflects an effort by the government to associate Decho Meas and Decho Yort with the Prime Minister, who is also called Decho as he has been awarded this title by the King, thus placing him in the same lineage as the heroes. Furthermore, this suggests that the government strives to alleviate public criticism of its strong link with Vietnam by turning people’s attention to Thailand.

